

特別展示「昭和のビーズバッグー流行とデザイナー」 開催報告

原 田 喜 子

はじめに

令和5年（2023）11月12日（日）から17日（金）まで、関西大学博物館にて特別展示「昭和のビーズバッグー流行とデザイナー」を開催した。博物館実習展とミニテーマ展「復元 日本中世の天台談議所一成菩提院聖教から一」との同時開催であった。

ビーズバッグとは、ビーズ刺繍によって表面を装飾したハンドバッグのことである。日本では高度経済成長期の昭和34～35年（1959～1960）に流行の最盛期を迎えたとされ、芸術鑑賞会や食事会、成人式など、主に女性の特別な日の装いに華を添える存在であった。

本展示では、昭和30～50年代に日本国内で製造されたとされるビーズバッグ50点を、4つ

のデザインに分けて展示した。ビーズ刺繍による模様は、ビーズの並べ方、色や形の異なるビーズの組み合わせ、ビーズを盛り上げるなど、多様な技法を使って表現される。黒色の布地に黒色のビーズを刺繍することはさらに高い技術を必要とし、製袋にも高い技術が使われている。また、フラップや留め具のデザインも見どころの一つであり、ビーズバッグに詰まった多彩な技術を展覧することを狙いとした。

1. 洋風デザイン

1つ目のデザインは、洋風デザインである。高度経済成長期において、市民の間で音楽会や食事会などが催されるようになり、洋装でドレスアップした女性はアクセサリーを兼ねて小型



展示風景



洋風デザインの展示（部分）。色別、形別など、デザインの特徴が分かりやすいように配慮して並べた。

のハンドバッグを身に着けた。ビーズバッグは、20cm四方に収まるほどのサイズで、色はシルバー調に仕立てられたものが最も多く、他の色では、ホワイト調、ブラック調、ゴールド調が多く見られる。

昭和34年（1959）に発行された雑誌『婦人画報』（1959年10月）のコラム「おしやれなアクセサリーズ」で、ファッションデザイナーの森英恵（1926-2022）は「音楽会や、パーティやフォーマルな外出のときには、中に入れるものを、ハンカチとルージュとコンパクトと小さいドル入れくらいに整理して、小型のクラッチバッグにするといい。」と記している。このようなマナーが理由となって、ビーズバッグは小さなものが多いと考えられる。内側に小さなポケットとそのポケットにちょうど入るぐらいの小さな鏡が付属している例が多数あり、バッグと同柄でコインケースを伴う例も展示した。

2. 和風デザイン

2つ目は和風デザインである。女性の洋装が

普段着として定着するなか、和装は特別な日のおしゃれ着として需要が高まっていった。ハンドバッグは洋装のためのものであったが、和装にも合うデザインが考案されるようになる。

ビーズバッグも和装向けの柄がデザインされ、バッグと同じ柄を施したビーズの草履がセットで販売されることもあった。使用される模様や色は着物の流行と関係する傾向がみられ、その例を踏まえて展示した。和風デザインのビーズバッグは、模様を片側に大きく施し、もう片側は小さく模様を施したものが多い。これは、着物の帯の「お太鼓柄」に共通した柄付けが見いだせる。「お太鼓柄」では、結んだ時に背中側になる幅広く見える部分に大きく模様を施し、お腹側の狭い部分に小さく模様を施すのである。

前出の『婦人画報』に掲載された森英恵のコラムにおいて、「手のついた型でも、こわきにかかえるような持ち方にしてマダムらしい落つきを出す。若い人ならブラブラさげても元気そうに見える」とある。このことから、持ち手がついているものは主に若年者向けで、持ち手のな



色とりどりのビーズで花を描き、周りの地の部分を白いビーズで埋めるデザインは数多く見られる。左の展示品は、花卉部分のビーズを盛り上げて立体的な工夫が施された作例。ハンドバッグと草履のセットで昭和43年頃に高島屋で販売されていた。



和風デザインの展示（部分）。バッグの反対側のデザインを写真で展示した。

いものは年長者向けであることがわかる。バッグによっては持ち手をバッグの中に収納できるタイプがあり、若い頃から年長まで長く使える工夫であったと考えられる。

3. 抽象的デザイン

3つ目は、抽象的デザインである。個性を表現する服装が求められるようになると、新たなデザインが生み出されていった。ビーズバッグでは、抽象的な絵柄が見られ、デザインの多様性ととも洋装にも和装にも合わせられるような汎用性が求められたのではないかと考える。また、抽象的なデザインのもものはバッグのサイズが大きいものが見られ、より日常の使用に適した仕様がうかがえる。

一見では何が描かれているのかわかりにくい模様でも、反対側の模様から、鳥が群れを成して飛んでいる様子が抽象化されているとわかる作例がある。その模様は、俵屋宗達（活躍期1602-1635）が描いた《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》を連想させられ、古典柄を変革することで、当時

の新しさを感じさせながらも、親しみやすさを狙ったデザインであると捉えられる。他にも、同色のビーズで大きな幾何学模様を描いた作例、複雑に交差する線による模様が、反対側の模様を見ると、木立の風景を描いているように見える作例、孔雀が羽を広げた様子を模様化したような作例などを展示した。慣例的な模様から脱した多彩なデザイン例を選んで展示した。

4. はしもとのデザイン

そして、4つ目は、株式会社はしもとのデザインを紹介した。はしもとは、大阪でビーズバッグを製造した会社である。明治から平成までの長い歴史を持つといわれるが、現在は廃業しており、詳細は分かりかねる。フランス式のリュネビルという方法でビーズ刺繍を行ったと聞く。製品は東京でも販売され、皇族が使用したという情報もある。刺繍されたビーズの並びが極めて整然としており、残された製品から技術の高さを知ることができる。ここでは、よりフォーマルな作例を展示した。



抽象的デザインの展示（部分）。前面の複雑な模様も、反対側に描かれた部分的な模様により、何が描かれているのか判明する場合がある。



楕円形の枠の中に紫色の花を描いた作例を展示した。窓のような枠の中に花や風景を描くデザインは、中国の陶磁器に見られ、西洋ではフランスのセブルが得意としたものである。はしもとのデザイナーは陶磁器のような工芸品からもデザインの着想を得ていたようである。ファッションデザイナーという職業が注目されるようになってきた時代において、ビーズバッグのデザイナーがどのように活動していたのかは、今後研究していきたい課題の一つである。

また、はしもとのバッグに添えられた手鏡と葉の一例も展示した。展示した葉は、片面にフォーマルバッグに関するマナーが記され、もう片面にはバッグのお手入れ方法が素材別に記されている例で、手鏡と葉にはいくつかのバリエーションが存在する。

おわりに

昭和の女性にとって、きらびやかなビーズバッグを所蔵することは憧れであり、多くの女性が買い求め、大切に扱っていたと、展示品の

所蔵者や来館者から聞くことができた。

その価格の一例は、昭和39年（1964）に『婦人画報』に掲載されたものが8,600円であった。同年の公務員上級乙（大卒程度）の月給が18,100円であったことから、ビーズバッグが高額であることが分かる。

ビーズバッグを専門に製造する会社は、最盛期では国内に10社ほどあったといわれているが、時代の変化とともに減少し、その数は現在2社だけとなってしまった。そんな中でも高度な製造技術が受け継がれ、海外からも注文が集まり、次世代の職人の育成が取り組まれている。

学術的にはほとんど研究されていないビーズバッグであるが、そこに込められた歴史と技術は日本の高度なものづくり文化を伝えるうえで重要な存在である。今後は製造工程や流通経路なども研究し、日本にある高度な技術とその成果を伝えていきたい。

関西大学博物館 学芸員



赤色、青色、黒色のビーズは、切り込みの側面を金色に着彩した手の込んだものを使用している。